# イギリス滞在記④　ドラゴンが寓意するもの

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao kuwabara*

## 聖ゲオルギウスとドラゴン

ここイギリスでは、古い教会や美術館に足を運ぶと、しばしば、ドラゴンに遭遇する。東洋の龍と同じように、西洋では、ドラゴンが古くから文化の中に溶け込んできたのだ。図像に表されたドラゴンは、四肢と翼、尾を備え、頭には耳を持つが、角はなく、口から炎を吐き出している。何より特徴的なのは、いつもドラゴンは、武装した聖人と対峙し、打ち負かされていることだ。ドラゴン退治で知られる聖人で、最も有名なのが聖ゲオルギウス（セント・ジョージ）で、彼を象徴する赤い十字がイングランドの国旗にもなっている。

図１　聖ゲオルギウスとドラゴン
（ノリッチ大聖堂のエセルバート門）

聖ゲオルギウスは有名な聖人だが、その生涯の詳細はわからない。カッパドキアの兵士だった彼は、紀元303年、ローマの神への犠牲を拒み、数々の拷問を受け、パレスチナの地で殉教したとされる。シリアやパレスチナでは、彼を奉じた教会が早くに建てられ、494年、教皇ゲラシウスⅠ世が彼を聖人の列に加えた。彼に対する尊敬は、8世紀までにはキリスト教世界全体に広がり、アングロサクソン時代のイングランドでも、彼を奉じる教会が建てられた。

十字軍の時代には、聖ゲオルギウスは騎士の守護聖人となり、その赤い十字が軍の旗印となった。1099年のエルサレム侵攻では、白地に赤い十字の鎧を付けた聖ゲオルギウスが現れて、騎士たちを鼓舞したとされる。こうして彼に対する評判に拍車がかかり、その結果、彼は、イングランドをはじめ、ヨーロッパの多くの国や地域の守護聖人として機能するようになる。

聖ゲオルギウスがドラゴン退治で有名になるのは、13世紀、ジェノバ、ドミニコ会の修道士がまとめた聖人伝『黄金伝説』による。それによると、あるとき、聖ゲオルギウスが訪れたリビヤの町には、国中に害をなすドラゴンが周辺の池に棲み、町の近くに来ては毒を人々に吐きかけるため、人々は、毎日、ドラゴンに餌として２匹の羊を与えていた。羊が乏しくなると、今度は法が定められ、くじのあたった子どもや若者が、血筋や貧富に関わらず、ひとりずつ、ドラゴンの人身御供に差し出されることになった。やがて、くじが当たった王女がドラゴンを待っていると、通りがかった聖ゲオルギウスが事情を知り、馬にまたがり、剣をとって、ドラゴンに深手を負わせた。ドラゴンが町に連れてこられたのを見た人々は騒然となるが、聖ゲオルギウスは、王と町の全ての人々が洗礼を受けるのと引き替えに、ドラゴンを殺し、荷車で町の外に投げ捨てた。

ロンドンのナショナル・ギャラリーにあるウッチェロの傑作「聖ゲオルギウスとドラゴン」（1470年頃）は、まさにこの場面を主題にしたもので、馬上の聖ゲオルギウスによる一撃を受けたドラゴンが血を流し、それを、正装した王女が見守る様子が生々しく描かれている。このように、キリスト教世界におけるドラゴンは、吉兆の霊獣とされる東洋の龍とは違って、退治されるべき邪悪の象徴であり、人間によって支配されるべき混沌とした自然を寓意として表したのであった。十字軍時代には、聖ゲオルギウスは、悪を倒した英雄として崇められ、プロパガンダに用いられた。イングランドでは、彼の祝日、４月23日が公的な休日にもなった。

## ドラゴンの都市、ノリッチ

キリスト教文化では邪悪の権化であるはずのドラゴンは、ところが、それ自体が町や人々の象徴になっている場合がある。たとえば、金融街として知られるロンドンのシティでは、聖ゲルギウスの赤い十字のエンブレムをドラゴンが支える図像が町の紋章になっていて、町の境界を表示するドラゴン像も何カ所かに設置されている。一方、白と緑の地に赤いドラゴンを大きく描いたウェールズの旗は、地震を起こし災厄を招く地中の黒い竜を、水の神である赤い竜が倒して平和をもたらしたというケルトの伝承に由来するらしい。さらに遡れば、パルティアやダキア人が用いていた蛇のような軍旗（ドラコ）を真似たローマ軍が、それをブリテン島に持ち込み、5世紀初頭におけるローマ軍の撤退後、ブリトン人が軍旗として使用するようになったのがイングランドのドラゴンの起源だともいう。

図２　ノリッチのスナップ・ドラゴン

このように、ドラゴンは、退治されるべき邪悪の寓意であると同時に、勇猛さをも体現し、土地や水など自然の象徴でもあるという多義的な側面を持つことが理解され、それらの性格が複合して、やがて、都市や人々の魂へと昇華されることになってゆく。

実は、ドラゴンの都市の異名をもつのが、筆者が滞在しているイングランド東部の古都ノリッチだ。15世紀初頭に記録が遡る「スナップ・ドラゴン」は、中に人が入って動かす模造ドラゴンで、「スナップ、スナップ」と叫び声をあげながら、回りの人を追いかけたりして祭を盛り上げた。「スナップ・ドラゴン」は、もとを辿ると、中世の時代、セント・ジョージのギルドが、聖人を讃えるギルド・デー（4月23日）に行っていた宗教的な行列に由来する。町で最有力だったこのギルドは、宗教改革後の1547年に会社に組織替えし、1731年まで存続した。ギルドの解散後は、ギルド・デーの行列は市長の行列へと性格を変え、1835年まで続けられた。識字率が高くない中世の時代、ドラゴンが登場する野外劇や行列は、宗教教育の一環であると同時に、人々の娯楽にもなっていたのだ。「スナップ・ドラゴン」の実物は、今は、博物館に静かに展示され、やはり人々に愛され続けている。